

## 祥月法要のお知らせ

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に遇い、阿弥陀さまの仏徳を讃嘆し、報謝の思いでお勤めする法要です。

日時… 四月 五日(日)

五月 三日(日)

(日本語…午前十時四十五分から)

(英語…午前十一時から)

※英語法要のみオンライン配信

どうぞ祥月でない方も皆様ご参拝下さい。

※日本語の時間を変更しました。

## 花まつり法要のお知らせ

春のやわらかな光の中、釈尊のご誕生をお祝いする「花まつり」をお勤めいたします。

花まつりは、お釈迦さまがお生まれになったことを喜び、そのご縁に触れて、私たち自身が仏さまの教えを聞く大切なご縁です。当日は、本堂に花御堂を設け、誕生仏に甘茶をそそぐ灌仏を行います。

日時… 四月 十九日(日)

なお、花まつり当日はサンガグループ主催のファミリールンチもあります。食事チケットの購入につきましては寺務所にお問い合わせください。

## キャンプ・ルンビニのお知らせ

今年の夏もワサガビーチにあるコテージにて、恒例仏教サマーキャンプが行われます。

日時…七月二十六日(日)より八月一日(土)

八歳未満のお子さまは、三十一日(金)の一日体験キャンプとして参加いただけます。



昨年のキャンプの様子

詳しくは英語版ニュースレターにて

## ダーナ奨学金のお知らせ

トロント本願寺ダーナ奨学金委員会では、対象となる卒業予定の学生の皆さまからの応募を募集しております。

### 応募資格

初めて応募される方で、浄土真宗本願寺派カナダ東部地区の寺院・教会の門信徒、またはその子弟・孫であり、大学・カレッジ・専門学校などの認可された高等教育機関に進学予定の方。

詳しくは英語版ニュースレターにて

## ボランティアの皆様へ

寺院内外に問わず、トロント本願寺の護持発展に対して、ご尽力くださるすべての方々感謝を申し上げます。

合掌



モミジでの定例法要

(第2木曜日10時半～)

※昨年より午前中に変更

## 敬老会が五月に開催予定

七七歳・八八歳・九九歳、百歳以上のメンバーをお祝いする敬老会が行われます。

どうぞお孫さんや曾孫さんなどご家族そろって参加していただければと思います。

お弁当など、申し込みが必要となりますので、詳しくは英語版ニュースレターにてご確認をお願いします。



ある力士が、額に宝石の飾りをつけていました。あるとき相撲を取っている最中に、その宝石が額の中にめり込んでしまいました。彼はそれを失ったと思い、医者のもとを訪れました。医者が傷の手当てをしようとする、その宝石が血や汚れに覆われて皮膚の中に埋まっているのを見つけました。そして鏡を取り出し、その宝石を本人に見せたのです。

この物語の宝石のように、仏性もまた、さまざまな欲や関心によって覆われ、私たちはそれを失ったかのように思ってしまう。しかし、よき師によって、それは再び見出されるのです。

仏性は、どれほど貪りや怒り、愚かさに覆われていようとも、誰の中にも存在しています。どれほど深く埋もれていても、それが失われることはありません。煩惱が取り除かれるとき、やがて必ずそれは現れてきます。

ちやうど力士が鏡によって自分の額の中にある宝石を見せられたように、私たちもまた、仏の光によって、煩惱の奥深くにある仏性を示されるのです。

では改めて、仏性とは何であり、どこにあるのでしょうか。そして、それは私たちの日常の自己とどのように異なるのでしょうか。

私たちの通常の自己は、五感——見る、聞く、味、触れる、触れること、そして思考——によって制限されています。しかしシェイクスピアが言ったように、「この世には、あ

なたの哲学では思いもよらぬことが数多くある」のです。

こうした世界や哲学を超えたものについて、私は羽田 信生博士が翻訳された『十二月の扇』を読みました。この中で清沢満之の思想が紹介されています。清沢は、「自己を高めるために最も大切なことは何か」と問い、「まず自己を省みよ」と答えています。

しかし、ここでいう「自己」とは何でしょうか。五感に縛られた日常の自己なのか、それとも死に備え、死を恐れない「独立した自己」なのでしょうか。

この独立した自己とは、「本願力に触れる自己」、あるいは「真の自己」、すなわち仏性とも呼ばれるものです。八十一歳を迎えようとする今、私はそのような、死を恐れない自己へと少しずつ向かっているように感じています。

この段階に来て、仏教は私にとってますます興味深いものとなりました。私たちは皆、この「真の自己」、すなわち仏性を持っており、それは阿弥陀仏と直接つながるはたらきを持っています。私は、よき師の鏡を通して、自らの仏性を見せていただいていると感じています。

浄土真宗では、これを「信心」といいます。すなわち、一念のよろこびです。阿弥陀仏よりその一念のよろこびをいただくとき、私たちは日常の自己を超えて、「真の自己」、すなわち仏性に気づかされていくのです。

皆さま一人ひとりが、その一念のよろこびを

体験されることを願っています。あの力士が自らの内に埋もれていた宝石を見いだしたように、私たちもまた、自らの内にある尊いものに気づかされるのです。

牧野先生より教えていただいた『浄土の旅路』の最後の一節に、「思わずほほえみのこぼれるような、深いよろこびが湧き上がる」とあります。

この混沌とした時代にあつて、私たちすべてが、そのような深いよろこびに出遇わせていただけますように。



合掌  
ミンスターアシスタント  
デニス・マドコロ

（橋本訳 本記事ではデニスさん独自の見解が含まれております）

## 枕経のお知らせ

ご家族の枕経を検討されている場合は、当寺院の寺務所へご連絡いただくようお願いしております。ご希望の時間を調整し、ご一緒に臨終の仏徳讃嘆のお勤め、もしくは、故人を偲びながら、ご家族の皆さんとお勤めをさせていただきます。当寺院に事前にご連絡いただくことにより、ご家族の質問への対応や必要な情報を提供することが可能となります。

トロント本願寺 理事会

その願い・誓いは四十八個に分けて建てられているので「四十八願」と呼ばれます。法蔵菩薩は五劫もの長い間思惟してこの誓願を選び取られました。

日々の生活の中で、私たちは「こうありたい」と願いながらも、その通りに生きることができない自分に何度も出会います。そのような自分を振り返るとき、「やはり自分はだめだ」と落ち込んだり、あるいは見ないふりをしてしまふこともあるのではないのでしょうか。

本来であれば、善い行いを積み、煩惱を断ち切っていくことが仏道であるとするならば、その道からこぼれ落ちてしまうのが私たちの姿です。しかし、そのような私をこそ見据えて立ててられたのが、法蔵菩薩の願いでありました。「このような私がいる限り、私が仏になることに意味があるのだ」「このような私を救うためにこそ、仏となるのだ」

そういう願いが、五劫という長い時間をかけて選び取られていったのであります。そして、その願いは、ただ思われただけではなく、「必ずその通りにする」という誓いとして、南無阿弥陀仏の名号となって私たちに届いています。この南無阿弥陀仏は、私たちが努力して生み出す言葉ではなく、法蔵菩薩の願いが完成し、阿弥陀仏となられたはたらきが、今この私にまで届いているすがたであります。

新しい生活が始まるこの季節、私たちはそれぞれに願いや目標を立てます。しかし、その願

いが続かないのもまた、私たちの現実です。

だからこそ、そのような私を見捨てることなく、すでに成就され、今もはたらき続けている願いがあるということ、この正信偈のことはを通して、あらためて聞かせていただきたいと思えます。自分の力で何かを成し遂げていくことができなくても、すでに願われ、誓われ、完成されたはたらきの中に、私は生かされている。そのことに気づかされるとき、私の歩みは「頑張らなければならぬ人生」から、「すでに支えられている人生」へと変わっていくのではないのでしょうか。願うばかりの人生であった私が、実は願われている存在であったと気付かされる。それがお念仏の教えです。

本日もまた、南無阿弥陀仏とお念仏申させていたがながら、阿弥陀さまの願いの中にある、願われている私であったと、共に聞かせていただきたいと思えます。

合掌

駐在開教使 橋本 顕正

### 仏性についての思い

皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

この混沌とした世界の中で、どのように日々を支えておられるでしょうか。そのような中で、私たちの浄土真宗の信仰の基盤が、支えとなることがあるのではないのでしょうか。

本日は、「仏性」について、私なりの思いをお話しさせていただきますと思います。

そもそも仏性とは何なのでしょいか。そして、それはどこにあるのでしょうか。また、日常の私たちの自己とはどのように異なるのでしょうか。

まず、私自身がこの世界の中でどのような過ごしているかをお話しします。私は学び、そして振り返ることを続けています。八十一歳を迎えようとする今、こうした学びと省察を通して、少しは成熟したものを身につけてきたのではないかと思っています。

仏教では、このような学びを「供養（くよう）」といいます。親鸞聖人は生涯を通してこの供養を実践されました。常に「自身を謙虚な学びの者として捉え、「弟子は一人もない」と語られました。また、「愚禿（ぐとく）」という名を名乗られ、それは「愚かである、無知な、ただの坊主」という意味です。

さて、この混沌とした世界の中の私の抛りどころですが、さまざまに仏教書を読む中で、心の安らぎを見いだしています。

その一つに、当寺でも新しく来られた方にお配りしている『仏教聖典 (The Teachings of Buddha)』という本があります。これは仏教伝道協会 (BDK) という団体から寄贈されているものです。

その中に、次のようなお話があります。

【次頁に続く】

# 佛心

今月の正信偈、私に届く願い



【原文】

法蔵菩薩因位時 在世自在王仏所

親見諸仏浄土因 国土人天之善悪

建立無上殊勝願 超発希有大弘誓

五劫思惟之授受 重誓名聲聞十方

【現代語訳】

法蔵菩薩の因位のとくに、世自在王仏のみもとで、仏がたの浄土の成り立ちや、その国土や人間や神々の善し悪しをご覧になって、この上なくすぐれた願をおたてになり、世にもまれな大いなる誓いをおこされた。五劫もの長い間思惟してこの誓願を選び取り、名号をすべての世界に聞えさせようと重ねて誓われたのである。

日本では、四月になると学校の入学式や会社の入社式があり、多くの人にとって新しい環境での生活が始まります。新しい制服を着て学校に通い始める学生、新しい職場で第一歩を踏み出す社会人など、それぞれが新しい出会いとともに新生活を迎えます。

時間というものは本当にあつという間に過ぎていくものです。この四月で、私はトロントに来て三年目を迎え、杉浦先生は二年目を迎えます。ついこの前こちらに来たような気がしますが、振り返ってみると、たくさんのご縁に支え

二〇二六年四月号

浄土真宗 本願寺派

トロント本願寺

られながら今日まで歩んでくることができました。

新しい生活を迎えるとき、多くの人は何かしらの目標を立て

てるのではないのでしょうか。「今年こそは勉強を頑張ろう」「新しいことに挑戦してみよう」「健康に気をつけて生活しよう」このように、それぞれが自分なりの願いや決意を胸に、新しい一年を歩み始めます。これから読んでいく正信偈の部分にも、実は阿弥陀さまの大きな「願い」や「誓い」が語られています。

正信偈では、今回からの四十二句は、親鸞聖人が最も大切にされた經典の一つである『仏説無量寿経』（大経）に依りながら阿弥陀仏の本願がほめたたえられていきます。

阿弥陀さまが仏さまになる前、法蔵菩薩という名前であり、どのようにして法蔵菩薩が仏さまとなられたのが『仏説無量寿経』の前半には説かれているのです。

法蔵菩薩が願いを立て、阿弥陀仏という仏さまになるのですが、師である世自在王仏という仏さまのもとでその願いを発されたわけです。

我々が浄土真宗でよくおつとめする「讚仏偈」は、法蔵菩薩が師である世自在王仏のことを讃嘆するうたであります。「讚仏偈」の仏とは阿弥陀仏でもお釈迦さまでもなく、世自在王仏という仏さまということになります。

そしてその世自在王仏から、数えきれないほど多くの仏がたの国（浄土）の成り立ちやその国土の人や天の善し悪しを見せていただいたあとに法蔵菩薩は願いを建立された。

それは、世自在王仏が法蔵菩薩に見せたどの国も、それぞれの仏さまが苦心して建立された理想の国土ではあるものの、すべての者が救われていくには限界があったのではからでないのでしょうか。善根を積み、煩惱を消すことで仏となるのが仏道の道理としては当然であります。諸仏の願いも善根を積んで煩惱を消していく存在を仏とする願いでありました。しかしそれでは仏となれない存在が出てきてしまいます。

そういった様子を観た法蔵菩薩の願いというものは自分勝手な願いではなく、「どうすれば、苦しみの中にいる人々が本当に救われるのか」「どうすれば、すべての人が安心して生きることで世界になるのか」ということを考え抜いたこの上なくすぐれた願い、これまでにないほど大きな誓いであつたのです。煩惱を捨てられず、善根を積むことのできない存在をそのまま仏とならせる願いを建てたのであります。それは私（法蔵菩薩）が仏になることと、すべての衆生を仏にしたいという願いが別個のものとして存在するのではなく、誓いとして全く一致したものであつたのでした。

【次頁に続く】